

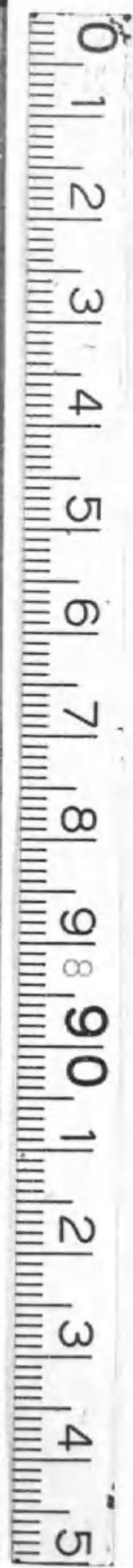


特217

69

養修の人偉

著里鶯林小



始



特217
69



偉
人
の
修
養

小林篤里著

東京出版通信社發行



序

古來世間にある修養書の類は其の数が非常に多い。ところが其れ等は皆同じやうに訓誡じみたものばかりで、それが爲に世人は稍々ともすると、修養といへば直ちに固苦しいものであるかの様に考へ勝ちである。

併し修養することは吾々にとつて一日も忽にするこの出来ない問題である。人間は生れた儘で自ら自分を統馭して行くことがなかつたなら、野蕃人に見るやうな結果に終るのは當然の理である。

身を修めて行くことに古今の別はない。先人の踐んだ修養法は又以て今人の取るべき道であらねばならない。古來英雄とか偉人とか呼ばれる者は澤山あるが、それらの人々は決して偶然に、偉人となり英雄となつたのではない。その裏面には人知れない苦心が潜んでゐる。

本書は今日見る無味乾燥な修養書の弊を補なふために、偉人としてその名を知られてゐる人々の蔭に潜んでゐる、數多の修養事項を述べ、偉人をして一層輝やきあらしめると同時に、現代の新人の以て同伴とすべき修養書たらしめんとしたものである。
最初から理屈を以て押し通さうとする修養書とは全く別の進み方をした所に著者の主眼がある。

十三年二月

鶯里山人

偉人の修養【目次】

其の道に熱心なれ……………一

京傳と馬琴の熱心……………三

藩山藤樹を動かす……………五

平田篤胤の發奮……………七

秀吉の忠實……………九

一休は眞を本とす……………一〇

西村左馬之助の眞正……………一三

忠興の節義……………一五

木村重成の忍耐……………一六

神崎の訛證文……………一六

江戸坦庵の母……………一六

盤珪和尚忿怒の修養……………一九
 徳川秀忠の律義……………二二
 家康公の質素……………二三
 板倉周防守の熟慮……………二四
 白川樂翁公の質素……………二六
 西郷南洲翁の質素……………二六
 高山彦九郎……………二八
 鷹山公の實踐……………三〇
 勝海舟の奇略……………三三
 大石良雄の人物……………三五
 義貞の同情……………三六
 塙保己一の信心……………三九
 上杉謙信の開悟……………四一
 頼山陽の氣慨……………四四

皆川洪園の忍耐……………四四
 西行の禪行……………四八
 經世家河村瑞軒……………五一
 徳川家康の熟慮……………五一
 福澤翁の獨立自尊……………五五
 黒田如水の儉約……………五七
 井伊大老の節儉……………六三
 秀忠の臣の膽勇……………六四
 偉人の訓言と壁書……………六六
 西郷隆盛の修養訓……………六六
 徂徠の高慢……………六八
 蜂須賀家政の禍……………六八
 山陽の孝養……………六八
 蒲生氏郷の妻……………六八

篤胤の孝行……………九八

秀政の度量……………九〇

手島塔庵の孝養……………九二

蔭山源七の武心……………九四

信綱の念佛……………九六

田村治衛門の忠義……………九八

青砥藤綱の潔白……………一〇〇

長政の異見會……………一〇三

民を治むる者の心……………一〇三

—「目次了」—

偉人の修養

小林鶯里 著

△其道に熱心なれ

大納言公任卿は歌道の達人であつたが、年老いて病魔に侵され、漸く重くなつて床に臥してゐる時の事であつた。矢張り斯の道にたづさはつて居た大貳の高遠がふだんよりも非常に華美な装束で公任卿の枕邊を訪れた、大納言は定めて自分の病氣を見舞ひに来て呉れたのであらうと思つたが、大貳があまりかしこまつてゐるので、稍々不審に思ひ。

「貴殿は何か用事があつて御出で下さつたのですかと」問はれますと、大貳は別に病氣の事等は何も申さないで

「實は歌に關する事で御尋ねいたさうと存じて參つたのでございます。と申しますのはあの貫之の歌に

逢坂の關の清水に影見みて今やひくらむ望月の駒

といふのがございますが、又私の詠んだ所の

逢坂の關の岩かどふみならし山立ち出る桐原の駒

この二首を吟じ合せて見ますに、二三回までは、私の歌の方が勝れてゐるやうに思はれますが、四五度まで詠んで充分に味つて見ますと、前の歌は殊に勝れて聞えますが如何致したものでございませう。随分考へて見たのでございませうが分明いたしませんので、大納言殿の御存命中に承つて置き度いと存じ參上致した次第でございませう」と申しました。大納言は侍者に扶け起されて起直り眼に涙を一杯湛へながら申されました。

「此の道に志す人々も自分が没した後は誰かあるかと心細く思つて居たのに貴殿の

如き熱心家のある事を知つて非常に嬉しく思ふ。この兩首を見るに、貫之の歌は別に左せる節もなくたゞなめらかに詠み下してあるのに、貴殿の御歌は詞の寄せは大層巧であつて、更に凡慮の思ひも寄らない姿であるから、二三度は優れて聞えるけれども、何回も聞くうちには深味が薄くなるのであらう」と答へられました。そこで高遠は打うなづいて

「お蔭で今迄の不審が晴れました。之から後は珍らしく詠んで事を作つた様な歌は作らないで、たゞ有の儘に詠むことに努めます」といつて立去りました。さうして翌朝になつてまだ日の出ない前に病氣の見舞に出掛けたといふ事である。物事は總てなまはらかな覺え方ではいざといふ時に決して役に立つものではない、自分が充分に納得する所まで研究してこそ初めてそれが自分のものになるものである。

△京傳と馬琴の熱心

山東京傳といへば小説作家として馬琴につぐ有名な人である。今日猶ほ残つてゐる作もあるが、京傳が小説を書く時は寝ることも食事をとることも忘れて只管書き耽つたのであつた。何々何か新しい意匠が浮んで来ると、たとへ真夜中であらうが飛び起きて燈をつけ机に向つて書き續けた。又時には自分が苦しんでゐる場面が非常に面白く浮んで来ると、家の周りを走り廻つて叫ぶことがあり、又は大きな聲を擧げて笑ふこともあつた。これ程の熱心を以て事にあたつたのであるから、食事の時間なども決して決して決つた事はなかつた、甚だしい時には便所にも行かずに書き續け尿器を自分の書齋に持つて来て書冊の間に之を置いて用をすまして平然たるものであつたといふことである。

又八犬傳や弓張月の作者として不朽の名聲を残してゐる瀧澤馬琴も京傳にまけない熱心を以て小説を作つたものである。ある日馬琴が小説の筋に苦しんでゐる時ふと大聲を出して獨言を初めた。……彼の下婢を縊り殺して、衣服を奪ふとする

と、その屍はどうしよう……さうだ井戸に投じて跡をくらますようにしよう……熱心にその筋を考へてゐた。丁度部屋の外に居た下婢が、小説の筋とは知らず、之を聞いて驚き自分が殺されるものと思ひ、直ぐに馬琴の家を辭して逃げ歸つたといふ事である。これだけの熱心があつてこそ今日までその名を稱へられるのである。

△蕃山藤樹を動かす

熊澤蕃山は中江藤樹の第一の門人として又江戸時代の學者として有名な人である。蕃山は京都の平安に住んでゐたが、夙に中江藤樹が學識の譽の高いのを聞いて、その門下に入らうと思つてゐた。ある時藤樹の家を訪れて、教へを受けやうと願つた所が藤樹は蕃山の願ひを一言のもとに斷つてしまつた。然し蕃山は口頭から慕つてゐたのであるから、どうかして聞き入れて貰はうと熱心に願つた所が藤樹は最後

に
『我は未だ人の師となつて導く程の人間ではない。貴殿は他に師を求めて勉強せられたらいいだらう』

といつて固く断つてしまつた。蕃山はもうこれ以上願ふ元氣もなく、藤樹のもとを辭して表てに出たが、一度志を立て、來たからにはおめく歸る事も出來ず、ややく門の前に佇んで考へたがその中にはたと胸を打つて『よし自分がそれ程までに先生を慣ふならば、それだけの熱心を示さなくては駄目だ、これから先生の許が出る迄二日でも三日でも門前に待つてゐよう』かう決心した蕃山は藤樹の門前に二日二晩ちつと座つたまゝ少しも動かなかつた。三日目になつて、藤樹の母がこの様子を見て家に走り藤樹に向つて、

『先日來た若者は随分遠方から來た由ですが、未だ門前にちつと座つたまゝ動きもしません。これ程迄熱心に懇請するのですから、之に自分の習つた所を教へたから』

とて誰が物好きに人の師匠になつたといふものがあらう。心よく教へてやつたらいいだらう。』

といつて頻りに勧めたので藤樹もやつと承諾し、蕃山の熱心はかうして藤樹の心を動し、愈々その門人となつて初めに數倍した熱心さで勉強に努め遂に池田光政の執政として、或は學者として今日までその名を稱へられてゐるのである。何事を爲すにも第一に必要なものは熱心でなくてはならない。

△平田篤胤の發奮

平田篤胤は國學の四大人として有名な學者である。秋田に生れて小さいときから學問に志してゐたが、偶々鈴屋翁の書を読んで發奮し十九歳の時一書を認めて家に遺して、單身江戸に遊學しようとしたが、もとより資金もなく、その時も財中にはたゞ兄の多賀主水からもらひ受けた、一兩の金があるばかりであつた。然し旅費に

乏しいことや、食費の缺乏位は篤胤の勉學の志には何等のかはりも起さなかつた。愈々家を出た篤胤はある時は古びた神殿の床下に眠り、ある時は廢寺の鐘樓に雨露をしのひで、朝夕の食物も、丁度折よく人に出逢ひ又は情深い人によつて貰はれた時は食し、その他は殆ど斷食して僅かに餓死をまぬかれて江戸に向つた。毎日かやうにして江戸の近くまで來たが或る日のこと、大きな川にさしかゝつた。勿論渡船の設はあつたが、悲しい事には渡場に支拂ふ青錢さへもなかつた。止むを得ず篤胤は自分の着物を脱ぎ腰の大小を括り合せて頭に結びつけ大きな河を泳ぎ渡つてやがて江戸に着いた。これ丈の努力をして江戸に着くことは着いたが、それから後の苦學は到底今日の苦學生の比ではなく、消防夫となつたり、俳優の門下生となつたり、或は商家の炊夫ともなり、辛苦の中に讀書を勵み遂に、屈指の國學者としての地位を得たのである。矢張り今も昔も艱難が人を玉にすることに於ては變りがない。

△秀吉の忠實

太閤秀吉の名は今日どんな所に行つても知らない者はない、然し秀吉が今日までその名を残したといふのは初めから偉かつたからではない。矢張り自らの努力によつて築き上げたものである。太閤秀吉といふと活達大度一點張りの様に考へる人があるが、實際は細心で且つ職務に忠實な人であつた。

ある時黒田如水の質問に答へて

『拙者は足輕から仕へて、一心に務めたら足輕がしらに取立てられた、實に有難いことだと心から感謝してゐる。それから一生懸命に努めたら又其の上を取立てられ遂に姫路一城を拜領するに到つた。拙者は一職を得れば一職、一官を拜すれば一官いよくその職その官の心頭をはなれません、只官それに向つて努めたばかりで其の他には別に何もございませぬ』

と申した。如水は黙つて聞いてゐたが、しばらくして畏まつて、『此れは誠にいゝ教訓を承つた』といつて之を筆記しておいた。その筆記は代々黒田家に傳へられ今日でも遺つてゐるといふことである。かくの如く一歩々々と進んで遂に天下の英雄として其の名を外國にまでとゞろかせるやうになつた。之も不斷の努力があつたからこそであらう。

△一休は眞を本とす

一休和尚は名僧として古今に知られてゐるが、和尚の一生を通じては實に色々の逸話や教訓が遺つてゐる。

一休和尚が紫野の大徳寺に住んでゐた時の事、宅間某といつて禪師と心易くし、時折り禪師を訪れて物語りなごしてゐた人があつた、宅間がある日の事いつもの様に禪師を訪れて色々話をしてゐるついでに、禪師に向つて言ふに

『貴殿は貴い御僧ではあるけれども、餘り打つけに人を教化せられるから、在俗の輩はごうも近より難いと見えて面白くない、非凡のものならばとにかく、凡人にはもつところやすく教へらるゝがいゝ、さうすれば皆が喜んで歸依するであらう。凡て人間はいゝ事は自分の事だと思ひ、悪い事は皆他人の事だと考へやすいといふ事は、禪師もよく承知してゐられるところであらうから、以後は其の邊を心得られたいがどうか』といふと、禪師は

『よし／＼心得た』といつて早速筆を取つて書かれたものがある。それを見ると『佛家に住まれば、いましめを以て本とし、三寶の海に入れば眞を以て本とし、身死して巖根にありては骨も亦清し』とあつた。禪師も亦眞を以て總ての本とせられたのである。人は常に誠實（正眞）を念頭において、自分の仕事に向つてはげまなくてはならない。

△西村左馬之助の真正

西村左馬之助といふ人は後に志賀與三衛門といつて、蒲生飛彈守氏郷の家臣で、非常に力の強い力士であつた、西村は去る日仔細があつて勘當せられたが、それから後漸く許されて歸つて來た、氏郷は西村の力が強いといふ事を知つてゐながら、一つ力を争つて見ようと思はれ、使者の者に西村を呼ばせ、澤山の人の居る中で相撲を取る事になつた。そこで西村は考へて見ると『相撲に勝てば主人の御心に反く譯であるし、それかといつて負けたとなれば、輕薄者と見られるに違ひない。』と思案にくれた結果『よし怒られても見限られるよりは優しだ』と決心して見事に氏郷に勝つた。氏郷は

『残念だ、今一度競はう』といつて再び取り組んだ、近習の者たちは何れも、

『どうか西村が負けて呉れ、ばいゝが、さうでない、手討に逢ふかも知れない』

△忠興の節義

と手に汗を握つて見物してゐた、しばらくはお互ひに力を盡してゐたが、西村は又心の中で『たとへ手討になると致し方がない。此度負けたとなると、いよく見限られるであらう』と一層力を勵まして、遂に再度の勝利を得た。一同は心配して見てゐると、氏郷はにつこりと笑つて

『實に見上げたものだ、西村の真心には感心の外はない』と賞賛して録を増された。真心は最後には勝利を得るものである。永遠の計畫を以て事をなすものは真心を以てしなくてはならぬ。

言ふには

杉原忠興は備後神戶の城主であつた。あるとき寄手の大將平賀隆宗と約束をして

『吾汝を射ん、汝死せば寄手速かに退くべし、若我射損じなば、此の城を貴殿に渡

さん』と言ひ、日を期して城外に兩將が會した、斯くして兩將對陣すること三年、天文十九年十月十三日の夜、城將忠興は自ら弓矢を携へて、陣頭に進んだ寄手の大將隆宗も又陣頭に進み出で

『さあ射よ！射損せば此の城を渡さるべし』と叫んだ、忠興がねらひを定めて放つた矢は隆宗の腹に當つたが、勢が弱くて殺すことが出来なかつた。忠興は持つてゐた弓矢を抛げ棄て、早速城に走り歸り臣下の者共を集め

『今晚中にこの城を明け渡すべし』といふと臣下の中には非常に慨いて

『明け渡すとはもつての外である。たとひ口約はありと雖も、君の矢を受けし隆宗定めて傷も重からん、其の者の生命も計り難きに、急いで城を明け渡すとは、餘りにも早計かと存じます』と申し出でた。そこで忠興は

『一旦城を明け渡すと約束した上は、どうしてもこの城を明け渡さなくてはならぬ。城は又他日武力をもつて取り返すことは出来るが、偽りを言つたとあつては末

代までの耻辱である』と言つてとう／＼城を明け渡したといふ事である。

△木村重成の忍耐

重成は豊臣秀頼の家臣とし、長門守として勇略才智を以て知られた人である。まだ重成が幼少の頃の出来事であつた。ある時ふとした事から御茶坊主の山崎三阿彌に無禮を加へられて、非常に罵詈雑言せられた事があつた。ところが重成はどんなに罵詈雑言を加へられても、莞爾と笑つて一向口ごたへをしようとしなかつた。友人やこの様子を見てゐた人々は、不甲斐なく思ひ重成に向つて、

『あんなに輕蔑せられて何故眞二つに切つて仕舞はれませんか』と口々に尋ねた。すると重成はおもむろに

『蠅は帝王の冠とも知らずに糞する事もある彼れ三阿彌の如き輩は元より取るに足らない者である。若し一刀のもとに切り捨てれば、殿中に血を流した罪によりて

我輩が切腹を仰付けられることは明かである。主君の御馬前で捨てるべき命を、蠅同様の者の前に捨て、はならない」といつて悠然としてゐた、近習の者共は重成の勘忍深いことに今更のやうに感心した、日頃の行ひが斯くの如くであつたので、段々重い役の上つて行つたが、大阪夏の役に奮戦の半ば戦死してしまつた。ならぬ勘忍をするのが眞實の勘忍である。

△神崎の証文

赤穂四十七士は武士の典型として古今に稱へられ、今尚ほ菩提所泉岳寺に行けば線香の煙りが殆ど絶間なく立ち上つてゐる。

この義士の一人に神崎則休（神崎與五郎）といふ志士があつた。四十七人は色々に姿を變へて、愈々本懐を遂げるまでの苦心は並大抵ではなかつた。神崎も色々と苦心をしたがある年姿を變へて、江戸へ下らうとして、遠州濱松近くの城下までや

つて来ると、一人の馬子が盛んに馬に乗る様にと勸めて
 『幸只今戻り馬ですから、お安く参りませう』といつた。神崎は別に疲れてゐる譯でもなかつたので、熱心に勸めてくれるのを断つた。それでも馬子は五月蠅く言ふのできつぱり断らうと

『拙者は馬は嫌ひだ』と言ひ切つたところが、馬子はごうとつたのか、非常に立腹して、いやといふ程罵詈雑言をあげせかけた。神崎は固より氣の強い士であるから心の中では『一刀のもとに……』と思つたが、『いや待て大事をひかへてゐる身が、馬子風情を相手にする時ではないと思ひ返し、馬子の言ふがまゝに従はうと、強ひて言葉と和げ

『而らばどうしたら御身の意に適ふであらうか』と問ふと、馬子は言葉も荒々しく『詫び証文を書き入れよ』と力み返した。神崎はそこで黙つて矢立を取り出して『士たる身を以て、貴殿に對し馬は嫌ひちやと申上候事、幾重にも不調法に候

依而詮證文如件」と書いて渡した。

神崎程の士が一介の馬子に罵られても主君に對する自分の責任を忘れずに、涙を飲んで詮證文を書く程の忍耐があればこそ、遂に目的を達する事が出来たのである。

△江戸坦菴の母

坦菴は伊豆の代官で、蘭學を研究し砲術に深かつた人である。海防の事に功があつたといふので正四位を贈られた。

坦菴の母は天保元年八月四日に逝去せられたが、病中少し氣分がよくなつた時、坦菴を枕邊に呼びよせて、自分が常に肌身離さず掛けて居た念珠を取つて坦菴に授けて

「我れ今死に臨んで、お前の文武の業に就ては、少しも心に掛る事は無いけれども唯一言申し残したいことがあるからよく心を落ちつけて聞いておかるゝがいと申

すのは他の事でもない、凡そ人が事をするには物に勘へしのばなくてはならない、願くば我なき後も、公務は勿論のこと、何事につけても天才をたのむことなく、事の大小輕重に論なく、飽くまで勘忍の二字を嚴守して事にあたられよ、斯う言ふからといつて、お前が日頃天稟の才能をたのんでゐると言ふ譯ではない、とかく少壯の人は才ある者も才なき者も勘忍する事が何よりも大切であるといふのである。之から後行末長き年月も、我身のことを思ふならば、今お渡しした念珠を母と思つて今宵の言を思ひ起し、決して才氣に任せる行ひをしてはならない」と戒めて瞑目せられたといふことである。この母の教育を受けてこそ蘭學者として後世に名を残すことが出来たのであらう。

△盤珪和尚忿怒の修養

播磨の人盤珪は元祿時代の禪僧として有名な高僧であつた。一日のことある僧が

盤珪の家を訪れて

「私は物事に付て腹が立つ性分で、時々非常に疝癪を起して、数々の失敗を繰返して来たが、どうかしてこの習慣を除くことが出来れば、私の幸福は勿論のこと、師匠もお喜びになり、老人や兄弟達も喜ぶことだらうと存じます」と言つた。盤珪が答へて言ふには

「お前は生來腹が立つて困るといふが、親に腹の立つ性質を産みつけられたと不服を言ふのか」と尋ねた。すると僧は

「どうもさう思はれます。両親がこんな怒りつばい人間に産んで呉れたことは誠に残念に思つてゐる次第でございます」と答へた。盤珪は尙ほ言をついて

「然らば其の腹の立つ奴を此處へ出して見ろ」

「いや、今はございませぬ、今は何も腹の立つ様な事はないのです」と言つた、盤珪は

「何だ、お前は産みつけられたと言つたぢやないか、早くこゝへ出せ」とせき立てたので、僧は始めて、物事といふものは自分の思ふやうにしようとした所で、人が相手にしてくれるものではない、腹が立つといふのは自分の思ふようにしたいからこそこのことで、我身といふ考へ、己といふ考へを除いたなら腹の立つ事は決してないだらうと悟つた。それから後は今迄の様な小さな事には決して腹を立てなかつたといふ事である。

△徳川秀忠の律義

家康公が駿府に隠退して大御所様といつてゐた時、徳川二代將軍の秀忠公が、江戸から駿府の家康公を見舞に行かれ、二ヶ月ばかりも逗留せられた事があつた。

或る日の事家康公は阿茶の局を御召しになつて

「將軍は年も未だ若いのに、二ヶ月も旅住ひでは定めし徒然な事であらうから花を

使つかひにしてお菓子くわしでも持もたせ裏道うらみちからしのびやかに遣つかはせよ、私わたくしが言いつたと申まをせば屹度きつと遠慮えんりよする事ことであらうから、お前まへの考かんがへでよく取計とりはかりへ」と申まをされた。そこで阿茶あぢやの局はねは「御心みこころのつきたる仰おほせかな」と思おもひながら、早速さつそく花はなを呼よびよせた、花はなは十八歳さむいの美うつくしい女をんなであつたが、殊ことに美うつくしく取とりつくるはせ、菓子くわしを持もたせて、背よひの口くちに裏道うらみちからそつと秀忠ひでたけ公こうの御部屋おへやへ遣つかはされた。内々なまくは阿茶あぢやの局はねから申まをしてあつた事ことだから、秀忠ひでたけ公こうは早速さつそく上下じやうげに着改きあめて、花はなが庭にはの裏戸うらどから來きるのを見みると、自分じぶんから進すすみよつて戸とを開ひらき、花はなを上席じやうせきの方ほうに進すすめ

「此この品しなは大御所おほごしよ様さまからの下くだされ物ものであらう、有難ありがたく頂戴ちやうだい致いたす」といつておし戴いたされた。戴いたき終はると

「さて、使者しやの役目やくめは終はつたから、花はなは急いそいで歸かへるがよからう」と言いひつゝ、自らみづか戸口とぐちまで送おくり出だされた、花はなはすごく〜と歸かへつたが、後あとになつて家康いえやす公こうがこの事ことを聞きかれ、

「我が子こ乍なら將軍しやうぐんは律義者りつぎものの第一だいいち人者にんしやである」といつて感心かんしんせられたといふ。

△家康公の質素

徳川とくがわ三百年さんねんの基もとを作つくつた家康いえやす公こうは並大抵なみたいていの凡人はんじんではなかつた、落着おちつきた思慮しりよの深ふかい剛膽かうたんな人ひとであつた。家康いえやすが未まだ三河さんかに在あつた頃ころ、毎年まいねん夏なつの中うちは麥飯むぎめしを常食じやうじよくとしてゐた、或ある日ひのこと近侍きんじの士しが、毎度まいど麥飯むぎめしばかりではと思おもひ、潜ひそかに白米はくまいの飯めしを椀わんの底そこに入れて、其その上うへに少すこしばかりの麥飯むぎめしをおほふて差さし出だした所ところが、家康いえやす公こうはおもむろに

「汝なんぢは予よの心こころを知らぬものと見みへる。汝なんぢの心こころでは予よを吝嗇りんしやくの者ものと思おもふであらうが、決けつしてさうではない、よく考かんがへて見みよ、今いまや天下てんかは擾亂ぜうらんして、兵甲へいかうを動うごかさぬ年としはない、士卒しそつは之これがために奔命ほんめいに疲つかれて、寢食しんじよくをも安やすんじない状態じやうたいである。此この秋あきに際さいして予よ獨ひとりが何どうして贅澤ぜいたくな事ことが出來できよう。且かつわが一身しんの奉養ほうやうを儉約けんやくして、少すこ

しでも軍費を増し、さうして我が一家を大きくし、同時に百姓共を少しでもねぎらつてやらうと考へてゐるのである。どうして予獨りが一時の豊かなところから思ふまゝな事が出来ようぞ、若しも自分だけが満足の生活ばかりしてゐれば、民を苦しめるばかりでなく、必ず家は衰へ、國は今日より一層亂れるに違ひない」といつて、種々と言つて聞かせた。白米の飯の上に麥飯を盛つて出した侍はもとより、之を聞いてゐた士卒は悉く主人の深慮、慈悲の心に感服して其の注意を服膺したといふことである。かゝる心得を以て立てたればこそ三百年江戸文化の基を作つたのである。

△板倉周防守の熟慮

板倉勝重は伊賀の守であつたが、京都の所司代に任せられて、京都に滞在中、江戸の本宅には周防子重宗と、内膳正重正の二人が留守居をしてゐた、三代將軍家

光公は二人を試して見ようと、わざ／＼混み入つた公事を作つて、周防守と内膳正とを召し、判断を命ぜられた。内膳正は將軍の言葉を聞くと直ちに「理非は明かでございます、斯々でございます」と裁いて退出してしまつた。周防守は、暫くは思案してゐたが、

「何れ改めて理非の曲直を申し上げ度く存じます」といつて退出した。

それから二三日たつて登城し、先日内膳正が申上げた事と同一の返答をした之を聞いてゐた人々は「内膳正は兄に優れた人物である」といつて賞め稱へた。

其の後伊賀守が京都から、江戸へ歸つて將軍に謁見し、色々話を交してゐる序に先日公事の裁きの事に就て、内膳正の事をほめられた。伊賀守は黙つて聞いてゐられたが、

「内膳正は未だ年若くて、何の分別もない奴でございますが、周防守は將來御用に相立つ者と存じております。」と申し上げた、之を聞いた將軍は不思議に思つて、

その理由を尋ねられた。伊賀の守は答へて、

「外でもございませぬ、公事を裁くは仕置の一條で、至極大切な事でございませぬ、僅か一言の事で、下々數千萬人の迷惑にもなり、又悦ぶ事ともなるものであるから決して軽々しく極めるべきものではございませぬ。常々仕置は大事なものであるからと繰返し々々言ひ聞かせておりました、それを先の先の知恵で輕卒に答へて、自分の頭腦を人に見せようとした内膳正は何の用にも立つべきとは思はれませぬ。何分ともこの邊の消息を充分御考へ下さいませ」といつて退出した。

それから二人は成人して各々自分の道をつくしたが、果して周防守は父の言の様に名譽ある人物となつた。

△白河樂翁公の質素

白河樂翁公の晩年の事であつた。その姫君が他に嫁ぐ事になつた、樂翁公に向ひ

「紀念のために何か父上に差上たいと存じますが、何かお好みのもはございませぬまいか」と翁の御内意を尋ねた。翁は

「天鷲絨の机掛が欲しいと思つてゐる」と答へられた。

姫君は早速それを調達して父君に贈られた。翁は、手ざはりがいかにも柔かいといつて非常に喜ばれた。それを聞いてゐた家來のものは

「それ程御便利に御思召すならば、何故もつと早く御命じになりませぬでしたか」と伺つた。翁は早速

「老人の身分で、餘り贅澤をしてはよくないと思つて差ひかへてゐた」と仰せられた。皆翁の心掛けに感心した。之は翁の質素を表す一事であるが、其の他翁は、常に綿服を纏ひ、暇さへあれば諸方から來た、手紙の中の前後にある日紙を召使のものに切り取らせて、それで障紙を張つたり或は紙燈籠を作つたり、自分の手習に使ふ材料にしたといふ。

△西郷南洲翁の質素

南洲西郷盛隆が一生を通じて質素簡潔であつた事は世人のよく知つてゐる所である。今二三の事實を見て自他の誠めとしよう。

参議陸軍大將としての西郷盛隆の住居は、日本橋の小網町にあつた。三棟の家屋と二棟の土蔵と二棟の長屋とであつた、而して西郷が日常起居してゐた一棟は八疊と玄關と、十二疊の應接室と、十二疊の待合室と、六疊の小間と、八疊の下男部屋と八疊と六疊の居間であつた。さうして家中に一人の女子をも置かないで、十四五人の書生と、六七人の下男とを置いてゐた、彼が陸軍大將の軍服は僅かに二領だけで、中の一領は熊本から敗退して日向の永井に來たとき、賊軍追討の聖勅を受けて官服を着するのは懼れ多い事だといつて、之を焼き捨てさせた。

曾て木戸孝允が各参議を集めて事を相談しようとなせられた時、各参議は皆集つて

來たのに西郷一人は來なかつた。そこで孝允は使を送つて出席するようにと言ふと西郷は其の時赤裸になつて、机に向つて一心に讀書に耽つてゐた。使者の傳言に對して

「着衣がないから、線先に干してある浴衣が乾くまで待つてゐて呉れと言へ」と答へて平然としてゐた。使者が歸つて來て孝允にこの事を告げると、呆氣にとられて苦笑してゐたが、暫くして使者の者に美服を一揃へ持たせて再び迎へにやつた。

數時間の後西郷は微笑を含みながら出て來て、
「木戸の服はこんなに短いな、アハ、ハ、ハ」と大笑ひをしてゐた。こんな所にも西郷の剛膽な所が充分に知られる。

又西郷が陸軍大將であつた時、太政官から退應しようとして、履物をさがしたが見當らないので、仕方なしに足袋跳足のまゝで歸らうと出掛けたところが、丁度折悪くも、夕立が急に降り出して、中々止みさうにもない。西郷は平氣で、ズブ濡れ

になりながら、應門を出ようとした所が、門衛に手酷しく叱られた。いくら「我輩は西郷だ」といつても中々門衛は信じない、どうしても門を通してくれないから、門の所に佇んでゐると、丁度岩倉公が退應するの逢つて、はじめて陸軍大將西郷隆盛であるといふ事が知れて、門衛は平伏して其の罪を謝した。

又参議の頃に、各参議が何れも、從僕に辨當を持たせてゐたが、ある日のこと、大隈参議の從僕が、西郷の從僕に向つて、

「君の主人の辨當は何だ」と聞いた。西郷の從僕は

「君驚くな、握飯だよ」といひながら、包を解いて見せた、成る程大きな握飯に味噌を塗つたものが五つ六つ包んであつたといふ。かやうに質實剛健な彼の生活は遂に大西郷を作り上げたのであつた。

△高山彦九郎沈勇

高山彦九郎が且て江戸を發して、郷里である上州へ歸らうとする途中、板橋の驛にさしかゝつた頃は、夜も既に深更に及んでひつそりと静まり返つてゐた。時に骨格の逞ましい男が二人橋の上に待ち伏せして、二人が頭を橋の中央に置いて、足を欄干の方へ出し、頭と頭とを連ねて、橋の上に一の字を引いたやうにして横たへてゐた。餘り廣もない橋の上の事だから、通行しようとするれば、二人を身體の踏まなうては通る事が出来ないのであつた。丁度そこを通りかゝつた彦九郎は暫く考へた末「此處は官道であるのに、此の二人が道を塞いで通行の妨害をするのだから、罪は當然先方にあるのだから踏んで行つたとて差支はないわけだ」と考へて、わざと一方の足で一人の顔を踏み、他の足で他の男の顔をいやといふ程踏んで、悠々と行き過ぎようとした。すると二人の男はがばとび起きて、盛んに彦九郎の傲慢と不遜とをせめた、果てには刀を抜いて彦九郎の身邊に迫つた。然し彦九郎は少しも驚かず、大聲を出して「咄」と叫んで悠々と行き過ぎた。二人はこの聲にびつくりし

て二の匂も出ず、追撃するだけの元氣もなくなつてしまつた。この二人の男といふのは強盗の親分であつて、常に手下を連れて、富豪を脅かし、財を取り立てるを仕事にしてゐた。後役人に捕へられて獄に入れられた時、人に語つて

「俺達は平生脅迫を仕事にしてゐたから、世の中に左程恐ろしいものはないけれども、嘗て板橋の橋上で行人を脅やかし、財を奪はうとした時には、空前絶後の恐ろしい思ひをした、今思ひ出しても戦慄を覚える」と語つた。その男といふのは即ち高山彦九郎であつたのだ。

沈勇に向つては何人も敵對することは出来ないものである。彦九郎に於ても、日頃の修養が賊をして平伏させてしまつたのである。

△鷹山公の實踐

東北米澤の藩主として樂翁公と並び稱せられた上杉鷹山公は實に實踐躬行の偉人

であつた。自分の治下に儉約の徳を奨励しようとし、之を政治の上に實行しようとした時に、先づ自分が日常の被服を改めなくてはならないと總て綿衣に改め、朝夕の食事も必ず一汁一菜の主義を確守した、公が自らこれを實行せられるので、家老の者はどうしてもそれを見倣らばすにはゐられなかつた、然し時には未だそれを實施しないものが見えたので老齡の身であるといふので、自分が綿衣の下に着てゐた絹の下着までも去つて綿衣に改めた、斯様にして自らが卒先して節儉の風を奨励したので、藩下の人民は忽ち儉約の美風を養成した。

ある時のこと、鷹山の近習の者が田舎に赴いて、財産家の家に泊つた。夜になつて湯に入る様に傳へて來たので、その人は衣類を脱いで屏風に打掛けておいた所、その家の主人が見て不審に思ひ、

「こんな粗末な衣類を何故それ程大切にせらるゝか」と尋ねられたところ、その人が答へて言ふには、

「實はこの衣服は殿様から拜領したものの故、之を大切にしているのである」と答へたので、その家の夫妻は今更の様に、鷹山公の實踐躬行の徳に驚いたといふ事である。この一事によつても公の藩下に儉約の風が行き渡つてゐる事が知られる。この身をもつて下を率ひるといふ事は、社會の人々が充分に努めなくてはならない所である。

△勝海舟の奇略

維新の偉人西郷南洲を知る人は必ず海舟勝安房を思ひ起すであらう、海舟が嘗て京都にある時、勤王黨と呼ばれる者の中に海舟を悪むものがあつて、彼を殺さうとして其の機會を窺つてゐた。或る日四條通りを過ぐる折柄物蔭にかくれてゐた、一人の覆面の武士が現れて、銃を以て將に海舟を射殺さうとした。所が海舟は少しも騒ぐ様子もなく平然として、靜かにその武士の方へ近寄つて、

「そんな事では到底俺の身體は打てん、ねらひが恰ではづれてゐるではないか」といつた。その時武士はこの剛膽な度胸に愕いて、一發もはなつ事が出来なくて、惶惶として逃げてしまつた。

又ある時當時の志士佐久間貞一、人見寧、梅澤敏の三人が鹿兒島に行つて、西郷翁を刺さうと思ひ、海舟に紹介状をたのんだ事があつた。海舟は早速筆を取つて「此の三士は幕士にて今般足下を刺さんとし態々御地に行くもの故、幸に接見の榮を垂れ給へ」と書いて與へた。神ならぬ身の三人は、書中にこんな事が書いてあるといふ事も知らず、海舟が立派に紹介して呉れたものと、非常に喜んで、南洲翁の所へ行つて面會を求めた、丁度其の時は熱い盛りであつたが、西郷の邸の玄關に諸肌脱いで、涼んでゐる大男があつた。すると三人は例の書面を渡すと、この男は直ぐに封を切つて見て、

「はい、吉之助といふのは私でございますといつて、奥の部屋へ通して、丁寧に

茶や菓子と與へた。三人が暫く休息した所を見て突然
 『さて、卿等は私を刺すといふ目的で來られた由、遠路甚だ御苦勞であつた』と
 いつたので、機先を制せられてしまつた三人は、今更どうする事も出來ず、おめお
 めと歸つた、先んずれば人を制する事は昔も今も變はない、海舟の奇略といひ、南
 洲の剛膽といひ實に立派なものである。

△大石良雄の人物

赤穂四十七士は主君の仇を報じ義士の典型として今日に到るまで人口に膾炙せら
 れてゐる。試みに義士の菩提所である芝高輪の泉岳寺に詣ずれば、四十七士の靈を
 弔ふ線香の煙は今尙盛んに立ち昇つてゐる。四十七士の首腦として劃策に頭をしぼ
 った人は大石良雄である。大石が非凡の人物であつた事は世人のよく知る所であら
 う。

大石は且て京都にゐた時のこと、伊藤仁齋の門に入つて經書の講義を聞いたこと
 があつた、常時の講義の風は大體を領得すればいゝといふ傾きがあつた、或日のこ
 と大石はいつもの様に仁齋の講義の席に列席して、講義の最中に、コクリくと居
 眠りを初めた、同じく仁齋の講義の席に居る人達は、大石の様子を見て、くすく
 笑つてゐた。それから愈々講義が終つて一同は外に出た所が、皆の者は異口同音に
 『大石の如き怠士に先生の講義などが何わかるものか』といつて非常に悪口を並べ
 た、丁度この時仁齋がこの有様を見て、

『皆の者よ、妄りに謗つてはならない、予熟々彼を見るに、彼は凡庸の人物ではな
 い、必ず何か大事をなすに違ひない。毎日の講義にしてもたとへ居眠りをしてゐた
 からとて、尋ねて見れば總て了解してゐるに違ひない』と言はれた。一同は不思議
 事に思つたが、果して大石は仁齋の講義は何一つ聞きもらすことがなかつた。
 斯様な人物であつたから、大石は決して艱難に屈する様な人ではなかつた。常に

餘裕をもつてゐた事は次の手紙によつても知ることが出来る。

前略、二月前に供頭を以て申附け置きたる、大手前右手櫓前の、都合三本の松の真中なるもの、枝振長く伸びて見苦しく、至急手入致すべきこと、何故に今日まで延引いたし候や、昨日登城の折、不圖見につき驚き入り候、早速手入致すべく、決して等閑に致し置き候ては相ならず此旨屹度頼み入り候、尙奥書院の庭の掃除行届き居らず明朝矢作ものまで申出で、早速手入致すべく、此段屹度頼み入り候、右誰々より申付くべきなれども、至急の事故此方より申送り候なほ今日暮方までに、人夫二人此方屋敷まで送り呉れらるべく、此又至急御頼申候

三月十九日朝

六助 爺

良雄

尙上例の鉢手に入り候や、もし見つかかり手元になれば、早速持参致すべく、此

方留守なりとも、奥にて貴殿の好物なる茶褒美に振舞ひ申べく候
此の手紙を見るに何も格別變つた手紙でもない、極めて平和な書信であるが、此の日附によると、江戸に於て淺野侯が變事に遇はれ、急飛脚が赤穂に着いたのが、三月の十八日の朝の十時であるから、赤穂の城中は上へ下への大騒ぎをしてゐた事は想像せられる、この六助爺への書簡は十九日の朝とあるが、普通に考へれば松の手入れや、庭の掃除どころか前後策を講じなくてはならない時である。斯うした時機にありながら、以上の様な平和な書簡を書き得るは、流石に大英雄であると云はねばなるまい。

△義貞の同情

建武の忠臣新田義貞は兵庫湊川の合戦に於て、足利尊氏のために打敗られ、部下の者に引れて京都へ上らうとしてゐる所へ、敵の兵が大將と見て取つて追ひかけて

來て、義貞を真中に取りこめて、さんくくに射つた、既に義貞の馬は射倒されて、命も危急の場合になつて來た所、味方の中から小山田太郎といふ士が走り出で、自分の馬に義貞を乗せて難なく其の場を引き上げさせ、自分はそこに止まつて追撃した敵と奮戦して戦死をとげた。斯様に小山田太郎が義貞の命に代つて自分が討死したかといふに、君臣の義は勿論であるけれど、此れ以外に且て義貞から受けた情けがあつて、それに答へるために百年の生命を投げ出したのである。

こゝに義貞の情けといふのはある時大軍を率ひて出陣し「諸士は下々の者まで作物を刈り、人家に押入つて、亂暴狼籍をして百姓をなやます者あらば速かに罪科に行ふべし」と命令を出した、所が小山田は青麥を刈り取つて自分の馬に食はせ、又澤山馬に積んで陣家に歸つた事があつた。所が奉行が此の様子を見届けて其の旨を義貞に申出た、義貞はつくづく思案して、小山田は法度を犯す人ではない、然るに斯様な事をしたといふのは、兵糧に困つての事であらうといつて、小山田の罪を

消してやつた、小山田はこの事に感激して、其れに報ゆる期を待つてゐたが、湊川で義貞の身既に危しと見て命に代つたのである。情けは決して人の爲のものではない。

△塙保巳一の信心

「さてく眼明きといふ者は不便なものだ」といつて燭の消えた時、弟子達に感銘を與へた檢校 塙保巳一は、七歳の時に盲となつた。それから或は弦歌を習ひ、鍼法を學んだが何れも面白くなく、遂に學者として今日までその名聲を稱へられてゐるのである。

保巳一は學問の道には到底真似る事の出来ない熱心さをもつてゐたが、又一方非常に信心深い人であつた、毎日般若心經を讀誦してゐたが、或る時志を立て、自分分は勾當に昇進したいものだと思ひ、勉強の餘暇に般若心經を、毎日百遍づゝ誦む

ことにした。一方では熱心に學問の道を勵み、一方では燃ゆる様な信心をした、その甲斐あつてか、百日の間般若心經を百遍づゝ讀んだとき、勾當に進むことが出来た。

そこで保巳一は大いに奮發して、今度は檢校の位置まで進まうと思ひ、前の様に又一日に百遍づゝの般若心經を讀誦した、かうして二千日の間續けたときに、檢校に立身することが出来た。

群書類聚は、保巳一の著述したもの、中で最も有名なもので、保巳一が三十四歳の時から、七十四歳まで、實に四十一年の長い間の苦心によるものである。この間も彼は毎日般若心經を讀誦して、ひたすらその著述の成功を祈つたのである。彼が其の回数を帳簿に控へたところによると、百九十三萬五千遍の數に上つてゐるといふことである。この回数を聞いただけでも彼が如何に平生の生活に信心を忘れなかつたかが知られる。

△上杉謙信の開悟

川中島の合戦に於ける勇者として、武田信玄と共に其の名も高い上杉謙信が、人となるまでには色々の苦心があつた、殊に謙信が禪の力によつて膽力を練つたことは、謙信の一生に非常に力強いものであつた。

謙信が血氣盛んな時分に、越後の北の方林泉寺に、宗謙といふ高僧がゐるといふことを聞いて、『よしその高僧の鼻を一つ挫き折つてやらう』と思つて、ある日のこと、微服して、多數の參禪者と共に、林泉寺の道場へ詣つた、丁度その時宗謙和尚は、梁武帝達磨初對面の話をしてゐたが、その話が終ると直ぐに謙信は、宗謙和尚に面會を願つた、許されて謙信が和尚の部屋へ入らうと、足を一步部屋に入れると、和尚は大喝して、

『達磨不識の話は何と合點が參つたか』と叫ばれた。謙信は餘り突然だつたので躊躇

踏してゐると、それを見た和尚は又

「大守はよく御弄説なざる様子なるに、今日は何故説破せられざるや」と言つた。謙信は汗を流してつゝ立つてゐたが、尙一言も應へることが出来なかつた、すると和尚は静かに謙信を顧みて、

「此の事を會得しようとならば、須らく大死一番して來給へ」と言つた。

謙信は草卒として退いたが、それから後自ら和尚のもとに通つて、數ヶ月の間熱心に教を受けた。遂に大いに悟を開いて、髪を剃つて入道し、さきに血氣にはやつて、輕心、慢心をもつて、大法を求めやうとしたことの誤りであつた事を悔悟し、改めて宗謙尙和の門に入つて研究することになつた。

和尚も彼の熱心な意義を容れて、自分の名前の謙の一字を與へて、今迄輝虎といつてゐたのを改めて、謙信と呼び、號を達磨の不識にとつて不識庵と呼ぶことになつた。

謙信と時を同じうするところの、所謂戰國時代の大將には、參禪してゐるものが非常に澤山あつた。一かどの大將になる位の者は矢張りその反面には、人知れない修養がかくれてゐるものである、吾々はかやうに偉人の修養を見るとき、彼等が偉人と呼ばれるのは決して偶然でないといふことをうなづくものである。

△頼山陽の氣慨

頼山陽は日本の生んだ歴史家として、世界に誇る程の學者であつた、短い一生ではあつたけれども、常に大義明分を明かにしようとなつた人である。日本外史、日本政記等は今日に到るまで名文として有名である。

山陽は常に大きな抱負をもつて事を爲してゐた、次にその抱負の一端を窺ふに足る彼の文章を引いて見よう。

「身は一室に偃仰して、心百世の失得に關する己が鹽齋を恤まずして、人の家國を

憂ふ、嗟々是れ何物の迂拙男兒ぢや、然りと雖も焉んぞこの迂拙を念ふの時なきを知らんや。」

之は嘗て自分の像に賛した言葉であるが、又彼が人に屈せぬ心事を述べて、

「此の膝諸侯に屈せず、聊か故君の徳に答ふ。此の眼之を群籍に竭して先人の囑を空しうせず、此の脚母の輿に侍して、二たび吉野山を廻り、三たび琵琶湖に棹し、四たび淀川を上下す、而も未だ嘗て朱頓の門に踵かず、此處に残杯冷灸をなめず、而もこの手黔黎の寒餓を援けんと欲するなり。」

といつてゐる、山陽の此の意氣は將に孟子が謂つた大丈夫である。この意氣と抱負ともつてこそ、日本外史の如き立派な歴史を草することが出来たのである。事を成さうとするものは何よりも第一に人を含むの氣概がなくてはならない。

△皆川淇園の堪忍

皆川淇園は儒者として有名な人である。淇園が生れて四五歳の頃にもう支那の大詩人杜甫の詩を覺えたといふ程の人であつた。之程の學者であつたが、平生から自分の身を修めることには、充分な注意を拂つてゐたのである。淇園が堪忍のことに就て述べたものに次のやうなことがある。

「五堪忍といふことあり、聖賢の百趣より出で、世藥をなすの基、人間安穩の大悟にして、修身の樞機なり、之を守る時は勞することなく、家富み榮え、之を守る時は亡ぶ。」

一、衣服は何のために着る、寒さを凌ぎ、暑さを厭はんがためなり。さすれば寒からず暑からずば、粗服にても厭ふべからず、美服に奢るは未だ寒暑の身にしみざる故なり、寒暑の身にしみなば、むしろ裸にても厭ふ者あるべからず。

二、食事は何のためにかする、空腹をやめんがためなり、さらば添物はなくて足りなん、添物なくして食の進まざるは、未だ飢の至らざるなり、飢の至る時は糟糠を

だも厭はず。

三、家は何のためにか作れる、雨露をいとはんがためなり、さあらば無益の造作なごなさで足りなん、水火の災に家を失はず、人の軒端にても厭ふものあるべからず。

四、妻は何のためにか持てる、子孫を嗣がながためなり、さあらば子孫あるものは妾などもたであるべし、妻子あるが上に妾をもつは色に溺るゝが故なり。

五、財は何のためにか求むる。生計の第一衣食を足らしめんがためなり、さあらば義を缺き恥を忘れて貪り貯ふるにも及ぶまじきことなり。』

之によつて見ても、日常生活に於ける萬事萬端について細密な注意をもつてゐたことがうかゞはれる。事を成さんとするものは、その時だけでなく、永遠の計を立て、進まなくてはなるまい。

△西行の禪行

高雄に住んでゐた文覺上人は、常に西行法師が、優れたる歌道の達人であることを聞いて之を嫉んでゐた、人に逢ふといつても、西行の事を告げて、

『遁世の士は一つの道にたずさはるべきものだ、詠歌などをして四方を歩き廻る等とはもつての外である、誠に憎むべき奴だ、もし西行に逢つたなら、彼奴の頭を打ち割つてやると思つてゐる』といつてゐた。文覺の弟子達は之を聞いて非常に恐れて、仲間とより集つては

『西行は天下の聞人だ、若しも先生があの方の言のやうにでもしたら、吾々はどうしたらいいだらう』といつて心配してゐた。

ある日西行は高雄山に遊んだところが、日が暮れてしまつた。どこかに自分を宿してくれるものはないものかと、思案してゐたが、ふと心に浮んだのは、文覺のこゝとであつた。そこで早速文覺の家へ行つて、一夜の宿を乞ふた所が、文覺は非常に喜んで、心ひそかに『日頃の思ひを遂げるのはこの時だ』と思つて、早速拳を握り

ふり上げたまゝ、戸を開けた、西行は悠々として家の中に入つた、文覺はつく／＼と西行の顔を見てゐたが、振り上げてゐた拳をこそ／＼と下して鄭重に西行を迎へた。さうして

「兼てから御芳名は承つてゐましたが、今日はからずも御面談の出来るといふ事はこの上もない仕合せでございます」といつて、夜の更けるまで語りつくした。

翌日は朝から歡待した。愈々西行が歸ると、弟子の者たちが、

「上人は何故に、御自分の言を御踐みにならないのでございますか」と問ふた。文覺は、

「お前達は、西行の眼球を見なかつたか、彼がどうして我輩に打たれようや、我輩が打たれ／＼とにかく……」と答へた。弟子のものはこの言に感服したといふ。

西行は常に、和歌は禪程の修行である」といつてゐた位であるから、文覺程の人でも打つことが出来なかつたのである。

△經世家河村瑞軒

河村瑞軒は江戸に生れた一大經世家である。併し彼が名をなす迄には一通りや二通りの苦心ではなかつた。

彼が未だ若い頃には赤貧洗ふやうで、何か成功の端を開かうと諸所を廻り歩いたある時京都へ行つて何か職業を求めやうと思つて出立した。ところが大井川のあたりまで行つた時、僅かばかりの旅費はすつかりなくなつたので引き返すことにした。固より財中には一文だつてある筈がない。止むを得ず道中で西瓜の皮を拾つて食つたりして、辛うじて命をつないで品川宿までたどりついた。

品川まで來ると今更おめ／＼知人の家の前を通るのも恥かしいので、裏道へ廻つて歸ることにした。ふと見ると塵芥場の中に、古い雪駄が二三足捨てられてあるのが目にとまつた。

瑞軒は其の雪駄についてゐる皮をむしり取つて、近所の川で充分に洗つて、その皮を三角にして細い竹に結びつけ蠅たゝきを作つた。それを途々賣り歩いて漸く飢をしのいだ、其の翌日からは人のはき捨てた草鞋や、馬の草鞋などを拾ひ集めて、河の中に浸しておいて奇麗に洗ひ落して、細かく刻み、左官が壁を塗るときにツタにして賣り歩くなど、萬難辛苦をして遂に、大經世家としての河村瑞軒を作り上げたのである。

△山田長政の意氣

わが海國男兒の本領を遺憾なく海外に示したものは山田長政である。長政はシヤムに行つて日本町を建設し、一國の王として盛んな勢を示した人であつた。彼が未だ海外に出ない頃の我が國は實に天下泰平であつた。此の時代に遭遇した長政は、武士と生れながら、たゞ侯伯に仕へてゐることを屑しと思はないで、大

いに海外に雄飛し、我が大和男兒の意氣を示してやらうと思ひ立つた。然しその頃は今のやうに、海外に出るといふことが自由でなかつた。どうかして出ようとなへずその機を待つてゐたのであつた。ある時のこと、幸にも駿河の商人、瀧左右衛門、太田治右衛門等が、貿易を營むために、臺灣へ行かうといふので、大阪から出帆すると聞いたので、長政は早速二人のもとへ行つて便乗を乞ふた所が、一言のもとにはねつけられてしまつた。併し長政の心はもう決して押へることが出来なかつた。この好機會を取り逃がしては、自分の目的を達することは出来ないと、そつと大阪へ行つて、太田等の船に入り込み、船の底にかくれてゐた。愈々船は帆をあげて出發し、大阪の港から大分はなれた頃であつた。長政はひよつこりと顯れて、二人の前に熱心に同行を願つた、二人もその意外な出來事には驚いたが、今はどうすることも出來ず、遂に同行を許した、これが長政の海外に出る

第一歩であつた。

△卜傳の三子

神陰流の達人塚原卜傳には三人の子供があつた。卜傳の教へを熱心に受けてか、三人の子供は何れもよく劍道に通達して居つた。或る時卜傳は三人の技量を試して見やうと思ひ立ち、三人のうちで最も優れた者に神陰流の秘法を授けやうと思つた。

そこで小さな枕を戸幕の上に置いて、人が一寸でも觸れると直ぐに落ちるようにして、早速試験に取りかゝつた、先づ長子を用事があるといふので呼んだ、長子は直ぐに卜傳のもとへ來ようとした、ふと例の枕のあるのに氣づいて、そつと枕を下ろし、戸の側にすへて置いた。さて用事がすむと又もとの所へ上げて歸つて行つた。次男が同じやうに召されて、將に卜傳の部屋に入らうとしたとき、突然枕が落

ちて來た。次男はそれを手早く受けて、歸るとき又もとの所に置いて歸つた。三男を呼んだ。三男は俯して入つたので枕が落ちて頭にさはると、驚いて劍を抜き、枕が未だ地に落ちない中に眞二つに切りすてしまつた。

卜傳は三人の子供を集めて、自分が秘藏してゐた一刀を長男に與へて、

「汝よくその器に堪へたり」といつた。次男に向つては、

「汝よく努めよ」といひ、最後に三男に向つて大に罵り、

「汝早速此の地を去れ、汝は必ず家名を汚す者である」といつた。

△徳川家康の熱慮

武田勝頼がある時、家康を殺害しようと思ひ、忍びの者と呼んで、「家康公の寢所に入り、刺し殺して來い」と命じた。暫くして忍びの者が歸つて來た。勝頼は早速

「どうだつた、うまく刺す事が出来たか」と尋ねた。すると其の者は答へて、
 「床の下まで忍び入つて、色々工夫して見たが、床が低くて刀を使ふことも出来ず
 止むを得ず引かへして参りました」と言つた。

之は家康が自分の居室を築くときに、職人の者どもに命じて、

「床の高さは女子が上り下りするに不自由でないやうに作つてくれ、さうすれば若
 しも問者が忍び入つても、床の下で自由に刀を使ふことが出来ないから……」とい
 つてわざ／＼床を低く作つたのであつた。

家康は常にかやうな細かいことにも綿密な注意をくばつてゐたから、勝頼の難も
 無事にのがれる事が出来たのである。

併し餘り床の低いのは顯氣が多くて、健康の上に面白くないことは明かなことであ
 る。徳川代々の將軍の住宅には、此の顯氣を防ぐために、常に唐辛子を敷き詰め
 てゐたといふことである。

△福澤翁の獨立自尊

今日三田の慶應義塾といへば知らない人はないほどであるが、その開設者である
 福澤諭吉を知らない人は多いであらう。

日本が今日のやうに西洋諸國に少しもおとらない進歩を示したその初めは、福澤
 翁の力が大いに預つてゐる事を忘れてはならない。文明の新しい空氣を我が國に鼓
 吹し、獨立自尊の精神を高めたのである。

次に福澤翁の修養訓、處世訓を示して新時代に進む吾々の指針にしようと思ふ。

一、人たるの品位を進め、知徳をみがき、ます／＼その光輝を發揚するを以て本分
 となさざるべからず、吾黨の男女は獨立自尊の主義をもつて、修身處世の要領と
 なし、之を服膺して人たるの本分を全うすべきものなり。

二、心身の獨立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位をはづかしめざる

もの之を獨立自尊といふ。

三、自ら勞して自ら食ふは、人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は自勞自活の人たらざるべからず。

四、身體を大切にし健康を保つは、人間生々の道に缺くべからざる要務なり、常に心身を快活にしてかりそめにも健康を害するの養生を戒むべし。

五、天爵を全うするは、人の本分を盡すものなり、原因事情の如何を問はず、自ら生命を害するは、獨立自尊の旨に反する背理卑怯の行爲にして、最も賤むべき難所なり。

六、敢爲活潑、堅忍不屈の精神を公にするにあらざれば、獨立自尊の主義を實にするを得ず、人は進取確守の勇氣を缺くべからず。

七、獨立自尊の人は、一身の進退方向を他に依頼せずして、自ら思慮判断するの智力を具へざるべからず。

八、男尊女卑は野蠻の陋習なり、文明の男女は同等同位、互に相敬愛して、獨立自尊を全からしむべし。

九、結婚は人生の重大事なれば、配偶の選擇は最も慎重ならざるべからず、一夫一婦終身同室、相敬して、互に獨立自尊を犯さざるは、人倫の始なり。

十、一夫一婦の間に生るゝ子女は、其の父母の他に父母なく、其の子女の他に子女なし、親子の愛は眞純の親愛にして、之を傷けざるは、一家幸福の基なり。

十一、子女も亦獨立自尊の人なれども、其の初時に在つては父母之が教養の責に任せざるべからず、子女たるものは、父母の訓誨に従ひて、孜々勉勵、成長の後獨立自尊の男女として、世に立つの素養をなすべきものなり。

十二、獨立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも、自ら學問を勉め、智識を開發し、徳性を修養するの心掛なかるべからず。

十二、一家より數家、次第に相集まりて社會の組織をなす、健全なる社會の基は、

一人一家の獨立自尊に在りと知るべし。

十四、社會共存の道は、人々自ら權利を護り、幸福を求むると同時に、他人の權利幸福を尊重して、苟も之も犯すことなく、以て自他の獨立自尊を傷けざるに在り。

十五、怨を構へ仇を報ずるは、野蠻の陋習にして卑劣の行爲なり。耻辱を雪ぎ、名譽を全うするには、須らく公明の手段を撰べし。

十六、人は自ら従事する所の事務に忠實ならざるべからず、その大小輕重に論なく苟も責任を怠るものは、獨立自尊の人にあらざるなり。

十七、人に交るには、信を以てすべし、己れ人を信じて人も亦己れを信ず、人々相信じて始めて自他の獨立自尊を實にするを得べし。

十八、禮儀作法は、敬愛の意を表する人間交際上の要具なれば、苟めにも之を忽にすべからず、只其の過不及なきを要するのみ。

一九、己れを愛するの情を擴めて他人に及ぼし、其の疾苦を輕減し、その福利を増進するに勉むるは、博愛の行爲にして人間の美德なり。

二十、博愛の情は同類の人間に對するに止まるべからず、禽獸を虐待し、又は無益の殺生をなすが如き、人の戒むべき所なり。

二十一、文藝の嗜は、人の品性を高くし、精神を娛ましめ、之を大にすれば社會の平和を助け、人生の幸福を増すものなれば、亦これ人間要務の一なりと知るべし。

二十二、國あれば必ず政府あり、政府は政令を行ひ軍備を設け、一國の男女を保護してその身體、生命、財産、名譽、自由を侵害せしめざるを任務となす、是を以て國民は軍事に服し、國費を負担するの義務あり。

二十三、軍事に服し、國費を負担すれば、國の立法に參與し、國務の用途を監督するは國民の權利にして又その義務なり。

二十四、日本國民は男女を問はず、國の獨立自尊を維持するが爲に、生命、財産を賭して、敵國と戦ふの義務あるを忘るべからず。

二十五、國法を遵奉するは、國民たるもの、義務なり、單に之を遵奉するに止まらず、進んで其の執行を幫助し、社會の秩序安寧を維持するの義務あるものとす。

二十六、地球上、立國の數少からずして、各その宗教、言語、習俗を異にすると雖も、その國人は等しく是れ同類の人間なれば、之と交るには、苟くも輕重厚薄の別あるべからず、自ら尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するものなり。

二十七、吾々今代の人民は、先代前人より繼承したる社會の文明福利を増進して、之を子孫後世に傳ふるの義務を盡さざるべからず。

二十八、人の世に生るゝ、智愚強弱の差なきを得ず、智強の數を増し、愚弱の數を減ずるは教育の力にあり、教育は即ち人に獨立自尊の道を教へて、之を躬行實踐

するの工夫を啓くものなり。

二十九、吾黨の男女は、自ら此の要領を服膺するのみならず、廣く之を社會一般に及ぼし天下萬衆と共に、相率ゐて最大幸福の域に進むを期するものなり。

△黒田如水の儉約

朝鮮の陣のとき、日根野備中守が選ばれて朝鮮へ使に行くことになつた。ところが備中守は家が貧しくて、渡鮮の仕度さへ出来なかつた。そこで三好新右衛門を使にして黒田如水から、銀百枚を借り受けて、萬端の仕度を整へて、朝鮮に渡りその使ひを果すことが出来た。

さて歸朝してから備中守は新右衛門と同道で黒田如水の家へ行つて色々と禮を述べ、暫く先の話などをしてゐる中に、如水は家の者と呼んで、『さきに貰つた鯛を三枚におろして、其の骨を唯今吸物にして出せ』と命じた。

これを聞いてゐた二人は心面白くなかつたけれども、蟲を殺して酒を戴いた。御馳走が終ると三好は先に借りた銀を取り出して返した。すると如水は、『最初から貸すつもりで出したのではない、ほんの饑別の徴として出したばかりだ』といつて、三好が再三強いて返さうとしたがとうとう受取らなかつた。客の前で鯛の事を命ずることの是非はとにかく、飲食のことには貰つた鯛もむやみに使はないで、朋友の急用のときには、銀百枚を吝まらずに出して與へたといふことは、平生の心掛けが思はれ、其の心事の潔白なことに感心するのである。

△井伊大老の節儉

彦根の井伊公へ加増の御沙汰があつたときのことである。吳服を司る家臣の者が、君の御前に出て、『前には御分限も少く、扶持せられる兵士も多いやうでございましたから、自然粗

末な品を御用ひになつたのでございませうが、此の度は大國の主とおなりになつたのでございませうから、服装は身の表とも申します位ですから、上等の品をお用ひになることは勿論だと存じます。就きましては織屋の方へその様に申つけておきませうか』と申し上げると、井伊公は急に顔色を變へ、太息をついて、『其の方たちは頼もしき者とはかり思つてゐたが、何といふ危険な心持の者だ、此の度御加増を賜つて大國の主とせられたのは、私どもに美服を着よといふお思召しではない、精兵を多く養つて、國の鎮めにしようといふ大御心からである。衣服などは前にもました粗品を用ひませうかと言ふのが、その方たちのたのもしき言ひ分だと思つてゐたのに、精品を着よとは何事だ、嗚呼世も末になつたものだ』と言つて暫く涙を流して暗然とせられた。此の様子を見て、膳部を司る家臣は、自分も獻立書を改めて懐にしてゐたが井伊公の態度を見て、

「御膳は今迄の通りに仕るのでございますか」と尋ねると、公は
「前車の覆るは後車の戒ぞ」と云はれた。

△秀忠の臣の膽勇

徳川秀忠公が大軍を率ひて信州上田の城を攻められたことがあつた。

その時前鋒の後目にあたつて石川玄番と日根野徳太郎は、冠ヶ嶽に陣をかまへてゐた。秀忠公は急に前鋒に報告する事が起つて来たので、使者の後目を島田平四郎に命ぜられた。兵四郎は公の命令は受けたものゝ初めて通る道であるから、地理は分らず、且つ城を廻つて行く路はまわり道で、往復するのに時間が多くかゝるといふので、たゞ一騎で城の大手へ行き、馬を下りて、城門を叩いて大聲を擧げて、
「我輩は江戸中納言の士である。今君の命を奉じて急に先陣に告げることがあつて行かうとしてゐるのである。然るに我輩は地理にも暗し、城を廻るのは餘程の廻り

道だと聞いてゐる。願くば城内を通して下されば幸福の至りに存じます」と呼ばつた。

門を通る者は之を聞いて非常に驚いた。早速此のことを城將の眞田昌幸に告げた。昌幸は、

「古へより敵人が使命を奉ずるに、城内を通りて行きし例はない、然るに此の者城内を通らんことを望むは、その膽氣の勇壯なること感ずるに餘りあり、若し道をかさすは怯弱を示すものなり。よしすみやかに門を開きて通すべし」といつた。そこで門番は早速その旨を兵四郎に告げたので、兵四郎は非常に喜び城内を通つて搦手に行き、

「此處を通さるからには、歸りの時にも通し給はれ」といつて立ち去つて。彼は公の命をはたして、暫くすると搦手の門を叩いて、通してもらふやうに請うた。

門番は驚いて又城將に報告した。すると昌幸は益々感歎して、

『その士に對面すべし』といつて兵四郎を呼びよせ、
 『今適人に城内を通らせたからは、ついでに城内の要害を悉く見て、能く覺えて
 おき、城攻のときに先登せられよ、元來要害は城廓の固めではない、只戦ふべき
 大將の腕次第である』といつて、兵四郎を導いて城内を悉く見せた。兵四郎は厚
 く感謝して城の中を一覽して後、大手門から出て、秀忠公に使命の趣を復命した。
 軍中の人々は口を揃へて、
 『道を借る人も借る人、貸す人も貸す人だ、昔から聞いたことのない希代の奇事だ
 實に英雄の所爲である』といつて、感稱した。

△偉人の訓言と壁書

○楠木正成公の壁書

- 一 禮をあつくして人の非を咎むるな
- 一 天堂を願はんよりも地獄を作るな

- 一 人事を言はんよりも我非を省みよ
- 一 立身を思はんよりも主恩を忘れるな
- 一 忠に安んじて死を恐るゝな
- 一 手柄立せんより下知に違ふな
- 一 身の爲に身を損ふな
- 一 我生命は主觀なもの私に捨つるな
- 一 金錢をためんよりも借金をするな
- 一 酒は飲むとも飲まるゝな
- 一 慈悲はするとも代りを取るな
- 一 着物は寒くない程
- 一 食物は腹一ぱい
- 一 物書けば讀める様に
- 一 物言へば聞える様に
- 一 學問は一生涯よ
- 一 矢鐵砲は當るが上手
- 一 刀は切れるが名作
- 一 俗は家職を専らにして後生を次にすべし
- 一 僧は菩提を専らにして世事を次にすべし

又
 君の爲に身を捨つるを忠といふ。親の心にそむかすよく事ふるを孝といふ。老い

たるを敬ひ、士卒を撫育し、國民を憐むを仁といふ。謙退辭讓を禮といふ。謀を帷幄の中に運らし勝を千里の外に施すを智といふ。かりにも虚言を構へず信を失ふべからず、大酒は失多く色情は身を失ひ、心ひがむは嫉妬偏執の深きなり、儉約を専らとして驕りを慎み、人の非を見て我が身の行を正すべし、我れ愚かなる故に壁書して慎とするのみ。

○豊臣秀吉の遺訓

- 一 よくを離るべし
- 一 人と物争ふな
- 一 何事も人なみになれ
- 一 何事も熟々物ひげすな
- 松平越中守の壁書
- 一 淫酒は早世の地形

- 一 女に心ゆるすな
- 一 朝寝するな
- 一 身の行末を慎むべし
- 一 物に退屈するな
- 一 堪忍は身を立てるの壁

- 一 苦勞は榮華の礎
- 一 多言慮外は身を損する根立
- 一 華美は借金の板敷
- 一 我儘は朋友に悪まるゝ障子

- 一 珍珠珍膳は貧の柱
- 一 仁情は家を治むるの壘
- 一 法度は僕を仕ふの屋根

○水戸黄門光圀の壁書

- 一 苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし
- 一 主人と親とは無理なるものと思へ下人は足らぬものと知るべし
- 一 子ほど親を思へ、子なき身は他を見て手本とすべし
- 一 掟におちよ、火におちよ、智恵なきものに恐るべし
- 一 慾と色と酒とはかたきと知るべし
- 一 小なる事に分別せよ、大なる事に驚くべからず
- 一 九分は足らず、十分は溢るゝと知るべし

一 分別は堪忍にあるべし

○森田三太夫劍術の壁書

がさつは臆病の花

堪忍は忠孝の下地

實意は自分の徳

○南條博士の家憲

一 妄言を言はぬ事

○俳人去來の壁書

一 我家の俳諧に遊ぶべし世の理屈を言ふべからず

一 朝夕かたく精進を思ふべし魚鳥を忌むにはあらず

一 速かに灰吹を捨つべし煙草を嫌ふにはあらず

一 隣の据膳を待つべし火の用心にはあらず

短氣は未練の相
心掛は手柄の基

心遣は分別のいろは
武藝はその身の慎

二、恩を忘れぬ事

三、陰日向なく働く事

○渡邊華山心の控

一 両親を置しからず致すべき様心得べきこと

一 學問をして遠く慮り書を書きて急を救ふこと

一 書物は經書、畫書此の外見るべからざる事

一 交り候人、佐藤一齊、本多思齊、此の二人は心事の相談を致しかくさず候事

臨池屋代、北青盧、瀧澤馬琴、此の三人は見聞を廣め、書籍等借用致し益友なり

清水俊藏、沼田棠太夫、此の二人は武道に達し、心得になり候事とも申し談じ候

らへば益友なり。折々往來致すべく候。棠太夫近頃知る人になりたれば未だ深く

は知らず。安積祐助、菊地順助、文事を談ずべし、谷文晁、市河米庵、檜山坦齊

立原杏所、書畫の道に深き人なれば益あり。交りて樂しむべし

一 常に交る、いと多し、家近き人は更なり、同藩の者は格別なる事なれども、交り

て己に益なく彼も益なし、彼來らば拒むべからず、我より迎ふることなかれ、義

理あしき事はなすことなかれ、信を忘るべからず、他人は格別なり、
一行儀作法、随分簡にして常に違はず、日々返思致すべきこと、飲食相節し、出入
動静相心得、前後寸陰を惜み思ふべし、遠慮第一のこと、言語多からず、一々詳
密に相辯候様心得べきこと、一寸書きつけ候ものすら書正しく文理相通じ候
様に致すべく候こと、

右の條々相守り、浮躁佞辯放肆のもの、心易くせざる様随分心得申すべきこと、第
一多難ならぬ様に致すべく、多擾なれば遠慮いたす間もなく自然と徒らに日を送る
こと出来るなり、兩親御出被成候内は事を曲げて内職出精致し困乏を救ひ候
手段第一の心得御兩親の御安心を鬼神に誓ひても祈り奉るべく候事
○伊達貞山公の遺訓

氣ながく心おだやかにして、萬づに儉約を用ひ金を備ふべし。儉約の仕方は不自由
なるを忍ぶにあり。此の世の客に來たと思へば何の苦もなし。朝夕の食事うまから

ずとも譽めて食ふべし、元來客の身なれば好嫌は申されまじ、今日の行をおくり
子孫兄弟によく挨拶して、娑婆の御暇申すがよし。

○山岡鐵舟の修身二十則

- 一 うそをいふ可からず候
- 二 君の御恩は忘るべからず候
- 三 父母の御恩は忘るべからず候
- 四 師の御恩は忘るべからず候
- 五 人の御恩は忘るべからず候
- 六 神佛ならびに長者を粗末にすべからず候
- 七 幼者を侮るべからず候
- 八 己れに心よからざる事は他人に求むべからず候
- 九 腹を立つるは道にあらず候 一〇 何事も不幸を喜ぶべからず候
- 一一 力の及ぶかぎりは善き方につくすべく候
- 一二 他をかへり見ずして自分よきことばかりすべからず候

- 一三 食する度にかしよくの艱難を思ふべし、すべて草木土石にても粗末にすべからず候
- 一四 殊更に着物を飾り、或はうはべをつくらふものは、心ににがりある者と心得べく候
- 一五 禮儀を亂るべからず候
- 一六 何時何人に接するも客人に接する様に心得べく候
- 一七 己の知らざる事は何人にでも習ふべく候
- 一八 名利のために學問技藝すべからず候
- 一九 人には總て能不能あり、いちがいに人を捨て、或は笑ふべからず候
- 二〇 己の善行をほこり顔に人に知らしむべからず、すべて我が心に恥ぢざるやうにつとむべく候

○宮本武藏の獨行道

- 一 世々の道に背くことなし
- 二 萬づに依怙の心なし
- 三 身に樂みをたくまず
- 四 一生の間欲心なし
- 五 我が事に於て後悔せず
- 六 善惡につき他を妬まず
- 七 何の道にも別れを悲しまず
- 八 自他共に怨み託つ心なし
- 九 戀慕の思ひなし
- 一〇 物事に好き好みなし
- 一一 居室に望みなし
- 一二 身一つに美食を好まず
- 一三 古き道具を所持せず
- 一四 我が身に取り物を忌む事なし
- 一五 兵具は格別餘の道具嗜まず
- 一六 道に當つて死するを厭はず
- 一七 老後財寶所領に心なし
- 一八 神佛を尊み神佛を頼まず
- 一九 心常に兵法の道を離れず

△西郷隆盛の修養訓

大膽、豪放、維新の偉丈夫として一世に名の高い西郷南洲は、實に逸話の人であつた。然し彼が常に自分の身邊に周密な注意を拂つてゐたことは次の修養訓によつても知られる。偉人といひ、英雄といひ、表れざる苦心、修業のひそんでゐることは言ふまでもない。決して偶然に偉人となり英雄となることはない。

一、道は天地自然の道にして、人は之を行ふものなり、故に天を敬するを以て目的となす、天は人も我も同一に愛す、故に我を愛する心を以て人を愛すべし

一、人を相手にせず、天を相手にして己れを盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし

一、人を籠落して、陰に事を謀るものは、其の事成ると雖も、活眼より之を看れば其の醜言ふべからず、人を推すに公平至誠を以てせよ、至誠公平ならざれば、決して英雄の心を攪ること能はず。

一、命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は始末に困るなり、此の始末に困る人ならでは、艱難を共にし、國家の大業をなす事能はず、然れども、此の如き人は、凡俗の眼には見るべからず。

一、身を修むるには克己を以て終始せよ。

一、道を行ふ者は、天下擧げて毀るも足らずとせず、天下擧げて譽むるも足れりとせず、これ自ら信ずるの厚きが故なり、

一、己れに克つに、事々物々、時に臨みて克つ様には克ち得られぬなり、平生氣象を以て克ち居るべし

一、道を行ふには尊卑貴賤の差別なし。

一、男子は人を容れ、人に容れられては、濟まぬものと思へ。

一、人の意表にいで、一時の快適を好むは、未熟の事なり、戒むべし。

- 一、堯舜を以て手本となし、孔夫子を以て教師とせよ。
- 一、平日道を踏まざる人は、事に臨みて狼狽し、處分の出来ぬものなり。
- 一、事には上手下手あり、物に出来る人、出来ざる人もなし、故に只管道を行ひ道を樂しむべし、
- 一、作略は平日致さぬものぞ。
- 一、眞誠の機會とは、理を盡して行ひ、勢ひを審かにして動くをいふにあり。
- 一、世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖の仕當て上げたるをいふ。
- 一、聖賢に成らんと欲する志なく、古人の事蹟を見て逆も企て及ばぬといふ様なる心ならば、戰に臨みて逃るゝより猶ほ卑怯なり。
- 一、天下後世までも、信仰悦服さるゝものは、只だこれ一箇の眞誠なり。
- 一、平日國家天下を憂ふる誠心厚からず、只だ時のはすみに乗じて、成し得たる事業は決して永續せぬものぞ。

- 一、何事も平日の用意は肝賢ぞ。
- 一、才に任して爲す事は危し。
- 一、忠孝仁愛教化の道は政事の大本なり。
- 一、事に當り思慮の乏しきを憂ふることなかれ、凡そ思慮は平生黙坐、靜止の際に於てすべし、時に應じ十に八九は履行さる。
- 一、過を改むるに、自ら過つたとさへ思へばそれにて善し、其の事をばすて、直ちに一步踏み出すべし。
- 一、文明とは道の普く行はるゝの謂なり、宮室の壯嚴、衣服の美麗外觀の華をいふにあらず。
- 一、人智を開發するには、愛國忠孝の心を開くなり。
- 一、過を悔しく思ひ、取締はんとて心配するは茶碗を割り、其の缺けを集め合せ、見るに同じ、詮なき事なり。

- 一、人材を採用するに、君子小人の辯、酷にすぎるときは、却つて害を引起すものなり。
- 一、道義に於ては、一心を願みず、必ず踐行すべし。
- 一、世上、十に七八は小人なり、よく小人の情を察し、その長所に應じて材藝を盡さしむべし。
- 一、至誠は當世に知られずとも、後世必ず知己あるものとす。
- 一、味噌汁の辛きも甘きも下婢を叱するに及ばぬ事なり。
- 一、正道を以て行けば、目前には迂遠なる様なれども、先きに行けば成功は早きものなり。
- 一、實なくして世に譽めらるゝは僥倖の譽なり。

△徂徠の高慢

肥後の國に水足平之允といふ人があつた。徂徠文集に「西肥の水秀才」と見えるのはこの人の事である。

平之允は十六歳のとき徂徠のもとへ書を送つて、經義を聞いたといふほどの神童であつた。あるとき、肥後に歸る人があつて、徂徠のもとへ來た。徂徠は早速華山の記を出して、

「お前はこの書物を持ち歸つて、水秀才に示し、句讀訓點を附けさせて見よ。水秀才が立所にやつてのけたなら、其の賞として我輩の雙方の耳を切り取つて平之允に與へようといつた。

その人は肥後に歸つて、秀才に示し、且つ徂徠の言つたことを傳へた。ところが秀才は見てゐる中に訓點も句讀も附けてしまつた。

翌年になつて其の人が又江戸に行き、徂徠に逢つて

「去年お約束をした通り雙方の耳を下さい」と言つた。すると徂徠は膝をたゝいて

歎息して、

『たしかに平之允は秀才だ、もし之を讀むことが出来なければ、一方の耳をも與へようが、之を苦もなく讀む程の神童なれば、自分の片耳を與へるには及ばない』といった。

みだりに人を見下げ、高慢な態度があつてはならない。

△蜂須賀家政の禍

蜂須賀小六の子に家政といふ英雄があつた。流石の秀吉でさへも家政には手古摺り、四國の長曾我部すら、家政を討手に向けるといふ前ぶれだけでへこたれてしまつたといふ。

或る時伏見の殿中で、石田三成が家政の差してゐる刀を非常に譽めた上に、『どうか我輩に譲つてくれ』といった。

當時三成の勢は盛んなものであつたから、大概の者ならば三成に望まれたなら自分には迷惑だと思つてゐても、

『それがし如き者の持物が、貴殿のお目にとまつて面目身に餘ることをごぞいいます』とか何とかいつて早速譲るのが普通であるが、家政は譲るところか却て、

『此の刀を御用ひになるには、腕に骨がなくてはなりません』と豪語した。同席に並み居る人達は、思はず愉快に思つてどよめき渡つたといふことである。

三成も流石は當時の旗頭であるから、其の場は笑つてすました。

その後家政は朝鮮征伐に加はつて大いに功を立てた、ところが歸つて見ると、病氣中の太閤から

『家政は朝鮮に於ける處置が面白くなかつたから目通りは相かなはぬ』といふことになつた。これは前に三成に向つて豪語したので、三成から太閤に讒言せられたのであつた。

口は禍の門である。吾々はお互ひに慎まなくてはならない。

△山陽の孝養

歴史家として有名な頼山陽が、三十一二歳の時日本外史を著述し終つて、誰かに見せようと思つたが、終に大舎の紹介によつて、東本願寺の學頭法海に見せることになつた。

山陽は此の時日本外史二十二巻の中、自分にも特意であつた第五巻を懐中にして大舎に連れられて法海を訪れた。すると法海は

「藝儒、久太郎といふものが京都にあつて、殆ど三年酒ばかり飲んで其の親を少しもかまはないといふことを聞いた、然もその男が自分の不孝をも顧みないで忠臣楠公の傳を作つたとかいふが、足下がまさかその人ではあるまい。忠臣といふものは必ず孝子の門に求めなくてはならない。不孝の子で忠臣の傳記を作るとすれば、若

し楠公が知るならば必ず屑しとしないであらう。自分もそんな不幸な人を見るのは好ましくない」といつて座にかへつて一心に經を讀んでゐた。山陽は背に一杯汗を流して、

「真に一宗の學頭である」と感歎した。それから翌朝になつて早速出發して藝州に歸り母をつれて再び上京して來た。

後になつて山陽が母をつれて吉野に行き櫻を見たことがあつた、すると老母は、櫻花の爛漫たる満山の景色を見て非常に喜び、

「之でもう私の願はかなつた」と言はれた、山陽は元來喜怒を色に表さない人であつたがこの時は、

「母のこの一言を得たるは、宰相となるにも勝つてゐた」といつて喜ばれたといふ。文學を研究せんとするものにしても孝養なきものは法海の言のやうなものである。法海の言は誠に至言であると言はなくてはならない。

△蒲生氏郷の妻

蒲生飛弾の守氏郷の妻は織田信長の息女で、容色は美はしく、貞節の聞えの高い婦人であつた、飛弾の守秀行はその子供である。氏郷の死後秀吉公が婦人を召されなければ承引しなかつた。すると秀吉公は怒つて、

「此の上は秀行の知行を没收しよう」と言はれた。家老たちは之を聞いて非常に驚き、秀行の身の上にかへても義理を立てられることは面白くないことかも知れないけれども、そこは我慢をして秀吉公の意に随つたがよからうといつて勧めた。夫人は非常に慨歎して

「相當に道を辨へてゐる人たちが、口をそろへてかやうな不義を勧めるといふことは實に口惜しいことである。私には決してそんなまねは出来ません」といつて早速尼になつた。

△篤胤の孝行

今日貞節のともすれば亂勝ちにならうとするとき、古人のうちにかゝる純潔婦の人を見ることは、學ぶべき所が多いであらう。

平田篤胤は有名な國學者であつた。著書も多くまた門人も千人以上あつたといふ。篤胤が且つて次の様なことをいつたことがある。

「神と親とを大切にす心得の人は、まづ道の本立の固き人ゆえ、其の人必ず君に任へては、忠義を盡し、朋友と交りては、信義があり、妻子に對しては慈愛ある人となることは言ふまでもない、だから先祖を大切にすのが人の人たる道の本であるといふのだ、何故といふに、其の先祖を大切にす行ひが、所謂孝で、孝なる人に不忠不義なる行ひをする人は決してないのである」と。之で見ても人倫の道の中で親によくつかへること、即ち孝行を以て根本といふこ

とが知られる。孝は百行の基といふ古語は今日と雖も實に金言である。古人の行蹟に照らして見ても、名を擧げ、功を立て、身を興した人は總て第一に孝行の道から發足してゐることが知られる。

△秀政の度量

秀政は信長秀吉の家臣として到る處でよく戦つた戦士である。天正十三年に越前の國を賜はつた、近江國佐和山城から北の庄城に移つたが、秀政は日頃家中の諸士や百姓町人などへの仕置がよくないといふので、城下の者で、城下町の辻々に、左衛門督秀政の悪い仕置き二十二三ヶ條を書きつけた大札を立てた。之を見た秀政の目附出頭人などはよりより相談をして、その大札を秀政に見せてこんな不都合な振舞をする者は、今後を徴しめるため嚴重に取り調べて處罰するやうにと申し上げた。

秀政はこの標札を見て、急に座を立つて、袴をはき、口をすゝいで座に歸り、その札を二三度おし戴いて、

「今の世にこれ程まで熱心に諫言してくれる者が他にあらうか、此の札は偏に天の與へられた所である、永くわが家の重寶にしよう」といつて立派な囊に入れ箱に藏めて、その後奉行や代官を集めて、それく仕置を改めたので、世の人たちは名人左衛門督と呼ぶやうになつた。

一國を治めようとする者は之だけの度量がなくてはならない、秀政のやつた事なごも僅かの事ではあるが、城下の人民の心持を機敏に把んで、之によつて自分の施す政治を手心した所は、總て上に立つて事を成さうとする者の必ず心得てゐなければならぬ呼吸である。

△手島塔庵の孝養

心學者として門弟を多くもつてゐた堵庵は、王陽明の學を説き、佛老の説を講じてゐながらも一方親に對しては非常に孝心深い人であつた。堵庵が日頃親に事へうとした孝道訓を見ると次の様である。

常に顔付をにこくとしてきげんよくすること。

己が受け得たる家業を大切にせい出し勤むること。

物の取遣、其の外一切に無理せず、無理言はぬこと。

諸人を愛し敬ひ、あはれみ深くして、かりそめにも人と争はず口論せぬこと。

相場事、博奕、茶屋遊びをせぬこと。

家内總じて仲よくすること。

父母の仰せに少しも背かぬこと、老父母を諫むるといふことは、常には大方いらぬ事。

常に外に出づるときは、必ず行く先を兩親に言ひおき、行く先のちがはぬやうに

する事、又歸りたるときは、只今歸り候といひて、兩親のお顔も見、此方の顔をも見せて、互ひに安堵すること。

萬事私に一錢にても錢をつかはぬこと、是は皆親のものなる故、ぬすみ同前にあたりて、冥加悪しと知るべきこと。

身の養生をよくし、大食大酒せず、灸など少しづゝにても毎月すえること。

朝は早くおきてきげんを伺ひ、夜はおそく寢て父母の寢給ふとき、また寒暑を伺ひ、御脊にてもさすり、御足にてもなでさすること。

父母より譲り受けしものは、衣服諸道具にても損せぬ様にし、いたゞき用ふること。

衣服食物にても心一ぱい父母のお好みのもの、着心よく、食ひ易きものを求めて進すること、これは人々身の上の上下あれば身分不相應の奢りは不幸になるなり。奢にならずして身分相應に出来ることをせぬも亦不幸なり。

父母のことにも分限より奢りたることはせぬものなり、奢りならぬならば、父母のことに簡略はせぬものなり。

△蔭山源七の武心

蔭山源七は名高い儒者であつたけれども、世事に疎く一寸見ると魯鈍な人間の様に見えた。ある年江戸勤番のとき、一人の武士が鍵を拵へ直したいと思つたところが、代りの鍵がないので、自分が日頃親しくしてゐる友人にその由を話すと、その友達は

「外に借りるといふ心當りもないが、蔭山源七は儒者でもあり、且つ武備のことに就ては疎い人間であるから、源七の所へ行つて源七の鍵を借りたがい、だらう、自分には幸に源七と心易い間柄だから、借りてやらう」といつて源七の家を訪れ、鍵が借用し度いといふことを述べて依頼して見た。

源七は暫く返事もしないで黙つたまゝ、差うつむいて赤面してゐたが、やつと顔を上げ、勃然として双眼に涙を浮べて

「平日非常に御心易く願つてゐる貴殿の御所望を満足したいのは山々であるが、不幸にして御所望に御隨ひ申すことが出来兼ねる其の理由は、自分は元來町人の子弟として育つて来たもので、聖教の片端を存じてゐたゝめに召し出され、今日斯様に各方々と同列の士の席を汚してゐるばかりか、重祿を拜領し、妻子を養ふことの出来るのは、此の上もない君恩である。自分は儒學の外武術のことは何も心得がないとは言へ、萬一戦場に臨むときには諸氏と同じく君の御馬前に立塞り、あの鍵を提げ、矢丸をさけず、眞一文字に敵中に馳せ入り、討死して君の御恩を奉ずる考へである。勿論諸氏の様が一番鍵を合せ、敵將の首を取るやうな働きは到底出来ないにしても、たゞ敵の中に攻め入つて、討死するのが自分に取つては満足に思ふ所である。だからあの鍵は使ひ方さへ知らないのだけれども、片時もはなすことは出来

す、人多き中に、源七ならば鍵を借りてもいゝと見立てられたことが恥しい次第である」といつてさめざめと泣いた。士は大いに迷惑したが、重々自分の誤りをわびて歸つた。

△信綱の念佛

松平伊豆守信綱が臨終のときに、御用の書類を悉く薬罐の中に入れて、令息甲斐守輝綱を呼んで

「我死なば此の書類を焼きて灰を集め、首にかけて葬つてくれ」と言遺して、其の後非常に苦悶してゐたが、漸くにして眼を見開き、近々の者を呼んで

「念佛を唱へれば來世に行つて助けられるか」と尋ねた。おそばの者は

「必ず安心して往生することが出来ると申します」と答へた、すると信綱は又「人は死ぬときの煩惱妄念で、來世にも念を離れないといふが誠か」と問ふた。

「左様に申す様でございます」と近習のものが答へた。信綱は

「然らば吾れは眼を閉ぢて、御奉公々々と唱へて往生しよう、われは年頃日頃、御奉公をとそればかり考へてゐるのだから、死んでもこの事の念を離れぬやうにしよう」と言つて、病苦の増して苦悶の頂上に達したときも、眼を閉ざ顔をしがめながら「御奉行々々」といつて、涙を流しながら唱へ續けた。そのうちにまた苦しみが少し減じたとき、眼を開いて

「幽霊といふものはあるものかないものか」と尋ねた。側の者が

「それは此の世に念を残す者には、随分逢つたと申しますから、或は有るものかとも思はれます」と答へると、信綱は

「然らばわれは死して後も幽霊となりて君を守護せん」といつてそのまゝ卒去したといふ。

△田村治衛門の忠義

尾張侯義直卿の時、名古屋城書院の柱に、何人のしたことも知れないが、家中九人の名を記しその名前の頭に悪人と書き、しめて十人として張紙をした者があつた。義直卿は不審に思はれ

「人数九人なるに、しめて十人と記した理由は如何いふ理由か、其の由を知つてゐる者は速かに申出よ」といつた。すると村田治右衛門が進み出て、その理由は近習の者に申上げさせますといつて

「九人といふのは家中で沙汰ある者、他の一人は憚ながら殿様のことでございませす」と申上げた、その仔細はとの事に、村田は紙面で申述べますといつて、義直卿の悪事十個條ばかりを書き立て、之等は何れも存じおるもので、何事だか御氣付きになるやうにと思つて書き記したのでございませす、と附記して差し出した。義直卿

は之を見て、大いに怒り、村田を成敗せよと二三の者に申し付けられた。

その時家老の竹腰山城守が村田のことを聞いて、ひそかに自分の宅に呼びよせておいて、登城して義直卿に謁見し、

「私儀よき浪人を一人寄寓させて居ります。此の者は所々に名を得た忠義の士で、御家のためお召抱へになつたがいゝと存じます」と申上げた。義直卿は之を聞いて直ぐに村田のことゝ悟り、其の日は黙して何の返事もなかつたが、山城守は重ねて村田が一命を賭して斯様な失禮の事を申上げた忠義は、實に見上げたものでございませすから、是非ともお召抱へになり度いと勸めて、義直卿も、承諾せられ、村田は多分の加増を受け重く用ひられることになつた。

正しき者は一時は悲境に陥るやうなことがあつても、最後には必ず頭を擡げるものである。一時をごま化して平氣でゐるやうな人間は決して永續きのするものではない。真心から出た事は何人をも動かさないではおかない。

△青砥藤網の潔白

最明寺時頼公は法會の時、青砥左衛門藤網が牛を曳いて川水を渡らうとして、牛が川の中に尿をしたので、藤網は牛に向つて、

「最明寺殿下の御佛事の様なことをする畜生め」といつて牛を撃つた。

此のことが時頼の耳に入り、直ちに藤網を召して糺明せられた。藤網は答へて、

「此の頃は大旱魃のために田や畑は水がなくて、百姓共の嘆きは一方ではない。雨を禱り田畑に水を汲み入れるなど實に忙しいのに、最明寺殿は佛事に賦役に繁くして、萬民の嘆きなどは少しも知り召さず、富み肥れた法師共を大勢集めて、珍膳の上で過分の御布施を賜ひ、法師たちの奢りは益々はげしくなるばかりで、樹下石上に心法を錬り捨身求菩提の佛意を汚すことは、恰も牛の尿で河水を穢すやうなもので、若し此の牛が陸上で尿をすれば、草一本でも早から助けることが出来るのに、

川水の中に尿をしては何の助けにもならない。殿下が若し佛意を穢す財寶で、萬民の嘆きを御救ひになれば、これこそ眞實の佛事であらうと思ふに」といつた。

時頼もこの位階を恐れない賢者の言に深く感じて、藤網を御家人として重く用ひ遂に天下の執權にまでした、其の後時頼公は、八幡の神夢であるといつて、藤網に三萬貫の加増を賜はつたが、藤網は辭して申すには、

「天下の政道を神夢を以てせらるゝのが、若し藤網の首を刎ぬべしと夢に見たなら罪のない者の生命までも断ち給ふのか、怪しい御加増は到底拜領することが出来ません」といつたので、その潔白の精神に萬民は感歎してほめ稱へたといふことである。

青砥藤網は經世家として有名な人であるが、彼が民の心を收めて、平和を保ち得たといふには、常に正しい道を、正しく進んだこと、民の立場に自らを立たせて事をしたといふ所に原因があると思はれる。

△長政の異見會

黒田長政は父如水の風を繼いで知勇兼備の勇將であつた。今黒田家の家譜に見える異見會の如きは非常に面白い仕組である。

毎月二三度づゝ家老がよつて談合するので、その談合は腹立てずの夜咄し會であつた。その會には別に六ヶ敷い規則もなく、初めにあたつて長政から、

「今夜は何事を言つても心にとめぬこと、又他言は決してしないこと、勿論その場で怒るやうなことの無いこと、何でも思ひついたことは差し控へないで言ふこと」等を言ふと一座の者もその誓に賛成して、一夜中各自の身邊のことから、天下の事政治の事などあらゆる問題を論じ合ふのである。

久しい間この會合を續けて來たが、愈々長政が逝去するとき、忠之へ遺言して、
「我等のなし來たつたやうに異見會の儀毎月一度は必ず開くべし」とあつた。

△民を治むる者の心

北條氏政が小田原の領主であつた頃に、年齢六十餘りかと思ふ遍歴僧が、不圖建札を見て、

「あゝ、北條氏も末になりけるかな、既に滅亡の兆が顯れ始めた」といつた。之を聞いた人たちは早速町役人に告げたから町役人は直ぐに馳せて、前の僧を招き、何故禁制の札に對して批難したかを尋問した、旅僧は自若として、

「制札に非理なことは毛頭もない、たゞ愚僧が申したのは、三十年前に此の地を通り過ぎたが、その時の制札には禁制の簡條が僅かに五ヶ條ばかりであつたが、只今見受けた所によると實に三十簡條の多きに及んでゐる。國君に威光があつて四民の服するときは、法令のケ條などは少くて世はよく治まる、國君の威光が衰へ、民服しなれば、法度の簡條は年々多くなり、政令は瑣細になるから、萬民は益々服し

なくなる。さうして國君の嚴密なのを却て譏るやうになる。かくの如く四民の心はなれるときは、どんな名君でも治めることが困難になる。是れ故に愚僧は滅亡の兆が顯れたと申したので、人の非を正さうとするよりも、まづ自らを省みて、自らを戒めれば昔の盛時に復るであらう」といつた、町役人は之を聞いて感心して、之を書きとめておいて、後の掟の助としたといふことである。

總て民を治めようとする者はまづ民の心を充分に汲まなくてはならない。人の上に立つ者は下の人の心にならなくては決して圓滿を見るものではない。

偉人の修養(終り)

昭和十三年十月二十日 印刷
昭和十三年十月三十日 發行

(定價金壹圓也)

不許複製

著者 小林善八

發行者 東京市中野區小瀧町四九番地
市川靖己

印刷者 東京市中野區小瀧町四九番地
東京出版通信社印刷部

發賣所

東京市中野區小瀧町四九番地
東京出版通信社
電話中野六七〇四番・振替東京八四八三八番

終

